

抄経産

「寄り添うだけでは被災地は救えない」。東電福島第1原発で、増え続ける汚染浄化後の処理水をめぐると、原田義昭前環境相の忌憚らない言葉は、ずばり本質を射ている。退任直前には「(処理水を海洋に)放出して希釈する他に選択肢はない」と述べて反発を買ったが、覚悟の上での発言だった。▼
処理水を含む放射性物質「トリチウム」は自然界に大量に存在し、紙一枚で遮蔽され皮膚も透過できないほど微弱である。体内に摂取しても速やかに排出され、世界各国がごく普通に海洋放出してい

る。だが、風評被害の増大を懸念する被災地に配慮し、これまで保管用タンクにため込まれてきた▼タンクは数年後に満杯になる。原田氏の直言は、誰かが言い出さなければならぬものだった。ところが、後任の小泉進次郎環境相はこの機を生かさなかった。「率直に申し訳ない」。12日に福島県の漁業関係者と面談した際には、あっさりと陳謝した。▼「(海洋放出は)世界全体の海洋環境に影響を及ぼしうる重大な国際問題となる」。韓国は早速、16日の国際原子力機関(IAEA)会合で無理筋な日本批判に結びつけた。小

泉氏はこの件について20日の記者会見で聞かれても、曖昧に言葉を濁して明確に反論しなかった。▼第37代米大統領、ニクソンは著書『指導者とは』で、口達者で雄弁に所信を述べ、マスコミや同僚を驚かす新人政治家について論じている。「当初の珍しさはすぐに薄れ、彼らも『いかに語るか』より『何を語るか』によって採点され始め、まもなく単なるおしゃべりでしかないことが分かる」。▼もとより、小泉氏は新人ではない。持ち前の発信力を期待される重責を担う閣僚である。だからこそ、その真価を見せてほしい。